

# 文集『道標転換』と雑誌『道標転換』 帰国運動とのかかわりから

諫 早 勇 一

「道標転換」( )は、すでに普通名詞として辞書に載っている(『研究社露和辞典』によれば、「政治的見解・社会的イデオロギーなどの思いついた転換」<sup>1</sup>とある)くらいポピュラーな概念であり、ロシア革命史・ロシア亡命文化史を学ぶものには、いまさら論じるまでもない基本的な概念と思われるかもしれない。だが、この一見常識とも思える概念についてさえ、今日誤った見解が流布している。

たとえば、研究社の露和辞典と並んで日本の露和辞典を代表する、岩波の『ロシア語辞典』で「  
」を引くと、『道標転換』とあって、「1921 - 22年にパリで発行された亡命知識人グループの機関誌」<sup>2</sup>と説明されている。もちろん、これはまったくの誤りではないが、『道標転換』というとき、このパリの雑誌より、1921年にプラハで刊行された同名の文集を指すことは常識だろう。さらに、亡命文化の研究書にさえ、誤った記述はめずらしくない。たとえば、フィンランドの研究者 Suomela によれば、「道標転換派の見解が公表された」のは「1921年パリ」(正しくはプラハ)においてであり、『道標転換』と題された文集には7つの(正しくは6つ。なお、後述する文集『道標』は、7つの論文を収めていた)論文が収められていたという。さらに、この文集の執筆者たちは、「秋にプラハで」(正しくはパリで)「同名の雑誌を刊行しはじめた」<sup>3</sup>というから、この短い記述のなかに3つも無視できない誤りが含まれていることになる<sup>4</sup>。また、細かいことだが、論文集『ロシア亡命の文化的遺産』に収められたある論文では、文集『道標転換』の刊行年が1920年とされている<sup>5</sup>。

<sup>1</sup>「言語文化」7-2: 267 - 283ページ 2004.  
同志社大学言語文化学会 ©諫早勇一

こうした誤りはたんなる不注意の産物だろうか。いや、私はここに見過ごせない風潮を感じないわけにはいかない。つまり、文集と雑誌をふくめた『道標転換』は、あまりにも有名になり、あまりにも頻繁に論じられたがために、今日多くの論者は、これまでの論述に依拠するばかりで、みずからこれらに目を通すことを怠っているのではないだろうか。すでに1921年10月、雑誌『道標転換』創刊号において、ひとびとは「反論」(文集『道標転換』に向けた批判)しか読まず、実際にこの本を読まないで、「本になにが語られているのか」<sup>8</sup>をまったくわかっていない、と嘆かれていたが、同じことは今日でもいえないだろうか。

さいわい、北海道大学附属図書館所蔵のベルンシュタイン・コレクション<sup>7</sup>に、文集『道標転換』と雑誌『道標転換』<sup>8</sup>が収められていることがわかり、今回これらに目を通すことができた。文集『道標転換』および「道標転換」運動が、ほぼ同時期に起きた「ユーラシア主義」( )や、1922年にベルリンで発刊された新聞『その前夜』( )に比べて、今日無視されがちなのは、思想的な深さの違い<sup>9</sup>というよりは、著名人が加わったかどうか(『その前夜』には1923年にソ連に帰国する作家のアレクセイ・ニコラエヴィチ・トルストイが参加していたし、「ユーラシア主義」には言語学者として名高いニコライ・トルベツコイ、第二次大戦後にアメリカに渡って、神学者として有名になるゲオルギイ・フロロフスキイらが加わっていた)に拠るところが大きいのではないだろうか。たしかにクリュチニコフ、ウストリャロフ、チャホーチンといった名は、今日ほとんど忘れられているが、それは文集『道標転換』に始まるかれらの活動が無意味だったからではない。当時の亡命社会(さらにはソ連社会)に与えた影響力からすれば、かれらの活動はユーラシア主義者たちの活動をはるかに凌ぐといっていよう。そうした「道標転換派」の主張を、具体的に眺めながら、とりわけ「帰国運動」という観点から、その意味を再確認してみたい。

#### 1) 文集『道標転換』(1921年)

文集『道標転換』は1921年7月プラハで刊行された。6名の執筆者が合計6本の論文を寄稿しているが、これを収められている順番に並べれば、クリ

ユチニコフ「道標転換」、ウストリャロフ「Patriotica」、ルキヤノフ「革命と権力」、ポプリシチェフ＝プーシキン「新しい信念」、チャホーチン「カノッサへ!」、ポテーヒン「ロシア革命の物理学と形而上学」となる。1921年10月、クリュチニコフの編集の下、パリで同名の雑誌が発刊され、また脚光を浴びたためか、翌22年第二版が刊行されており、ベルンシュタイン・コレクシオンに収められているのは、この第二版である。全部で184ページだから、比較的薄い本といえるだろう。

さて、すでに述べたように、6名の執筆者には著名な知識人はいなかった。中心人物と考えられるクリュチニコフの経歴を見ると、1886年の生まれで、1917年まではモスクワ大学の専任講師として国際法を教えていた。政治的にはカデット（立憲民主党）の党员で、1918年から内戦に参加して、コルチャック軍の政府の外務大臣を務めているように、反ボリシェヴィキ活動の中核にいた人物といえるだろう。1919年に国外に出て、パリでカデット党员としての活動を続けた後、「道標転換」運動を始め、1921年にはベルリンに居を移して、新聞『その前夜』の発刊に加わり、1923年にはソ連に帰国している。ただ、不幸なことに、1934年に「反ソ宣伝」の罪で逮捕されると、1938年にはスパイ・テロ活動の容疑で粛清されている<sup>10</sup>。つぎに、ウストリャロフを見ると、1890年に生まれ、同じくモスクワ大学の専任講師として公法を教え、やはりカデットのアクティブなメンバーだった。革命後はペルミからオムスクへと移り、やはりコルチャックの政府とかがわっている。ただ、他の執筆者とは異なり、ヨーロッパではなくハルビンに亡命し（1920年）、この地でソ連のエージェントとして活動した後、1935年にソ連に帰国するが、同じように1937年逮捕・粛清されている<sup>11</sup>。

このように執筆者たちの多くは30代の若手思想家・政治活動家で、内戦で白軍に加わって反ボリシェヴィキ活動を行なった後、（ウストリャロフを例外に）ヨーロッパに亡命しているが、「道標転換」運動をみずから実践すべくソ連に帰国した結果、不幸な運命にみまわれている。だが、1920年代前半に、1930年代後半のスターリンの粛清を予見することは不可能だろうから、こうした悲惨な結末をもとに、かれらの活動を断罪してはならない。かれらの主張、活動はなによりも、1920年代初めの時代状況のなかで検証されなけ

ればならないだろう。

文集『道標転換』というと、チャホーチンの「カノッサへ！」がもっとも有名だが、運動全体から見れば、チャホーチンはとりたてて重要な地位を占めてはいないし、この論文も文集を代表するものではない。11世紀に神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世が、ローマ教皇グレゴリウス7世の許しを請うために、北イタリアのカノッサまで出向いた「カノッサの屈辱」に倣って、亡命者たちに、過ちを認めてソ連に赴くことを促したこの論文は、印象的な比喻によって注目を浴びたが、後に雑誌『道標転換』において「われわれにとって、ロシアはカノッサではない」<sup>12</sup>と否定されるように、運動全体のイデオロギーを担うものではなかった。それより、「道標転換」運動の名づけ親ともいべきクリュチニコフの論文から話を始めなければならない。

周知のように、「道標」の語は、1909年にニコライ・ベルジャーエフ、セルゲイ・ブルガーコフら7名のインテリゲンチヤが刊行した文集『道標』（ ）に由来している。1905年の第一次革命後、インテリゲンチヤの革命的傾向に危機感を覚えたかれらは、反唯物論、反マルクス主義の立場から、インテリゲンチヤを批判し、宗教を中心とする新たな精神的価値の追求を呼びかけた。したがって、『道標』につどったインテリゲンチヤのめざした方向は、反革命、反ボリシェヴィズムの立場といえるだろう。これに対して、これから見るように、「道標転換派」は革命容認、親ボリシェヴィズムの立場だから、『道標』とは反対の立場、すなわち道しるべを反対に向けた立場といってよい。だからこそ、「道標」に対して、「道標転換」という語が生まれたわけだが、それにしても、どうして自分たちの立場を言い表すのに「道標転換」というややこしい表現を使ったのか、なぜそこまで「道標」にこだわらなければならないのか、という疑問は残る。クリュチニコフの巻頭論文に読みとらなければならないのは、革命に対するかれらの立場だけでなく、『道標』に対するかれらの嫌悪感と親近感だろう。

「道標転換派」の主張の根底には現状追認がある。つまり、1917年に十月革命が起きてからやがて4年を経過しようとしているいま、そして前年の11月にウラングリー軍が敗退し、内戦も終結したいいま、ソヴィエト政権を承認する以外に道はない、という考え方だ。クリュチニコフはいう。「革命はあら

ゆる障碍を乗り越えて、堂々と揺るぎなくロシア人の生活に入り込み、しっかりとそこに根を下ろした<sup>13</sup>。」「革命が実現した以上、革命を受け入れなければならない<sup>14</sup>」と。だが、これだけの主張なら、文集『道標転換』が大きな反響を引き起こすことはなかつたろう。かれらの主張が大きな波紋を呼び起こしたいちばんの理由は、この主張をインテリゲンチャの義務と結びつけたことにあり、かれらが「道標」の語にこだわった理由もそこにある。

すでに触れたように、文集『道標』はなによりも当時のインテリゲンチャ批判の書であり、インテリゲンチャと革命の問題を正面から取り上げていたが、クリュチニコフの「道標転換」も、革命におけるインテリゲンチャの役割を中心の課題としている。彼はいう。「ロシアのインテリゲンチャは、本質的にマルクス主義的であり、ニヒリスト的であり、革命的である、すなわち、現代風にいえばポリシェヴィキ的である、と特徴づけた点で、『道標』はまったく正しい<sup>15</sup>」と。「ロシアのインテリゲンチャとロシア革命とは、ほとんど神秘的なまでにお互いに結びついていて、まったく切り離しがたい<sup>16</sup>」のだ。それでは、現時点でインテリゲンチャは具体的になにをすればよいのだろう。クリュチニコフの論はかならずしも明確ではない<sup>17</sup>が、断片的な論述からおおよそはうかがうことができる。「ロシアのインテリゲンチャを統一し、それを単一の強力な社会的勢力に変えることができるのは、勝利を収めた革命だけだ<sup>18</sup>。」「ロシアのインテリゲンチャが現状のままでは、ロシアにおける革命は十分な可能性を生かせない<sup>19</sup>。」「インテリゲンチャは確固とした社会平和のなかで、力強い社会的進歩の力として、将来のロシアにとって必要となるだろう<sup>20</sup>。」「われわれ国外のインテリゲンチャは、ロシア革命がロシアに根付いたことを認識して、ポリシェヴィキ政権を受け入れ、祖国においてインテリゲンチャとして貢献すべきだ　クリュチニコフの主張はこのようなものだろう。この主張は明らかに具体性を欠いているが、文集『道標転換』は、亡命インテリゲンチャへのアピールを第一の課題としており、具体的な提言は、むしろ後に見る雑誌『道標転換』に委ねられている。

さて、クリュチニコフの論文は、文集『道標』を引用しながら、これをもとに論を展開している点で、あきらかに『道標』への親近感を示しているが、同時に『道標』に参加した、あるいはこれに拍手を送ったインテリゲンチャ

への敵愾心も隠していない。詳しくは論じないが、彼の批判的になっているのは、まず執筆者の一人ピョートル・ストルーヴェであり（クリュチニコフは「ストルーヴェの論文 インテリゲンチャと革命 にかんしては、黙っていられない<sup>21</sup>」と述べている） ついで『道標』を歓迎したミリュコフ、アフクセンチエフたちである<sup>22</sup>。左翼インテリゲンチャの立場から、亡命後も評論活動を続けたこうした知識人たちから、「道標転換派」は激しい集中砲火を浴びることになるが、ポリシェヴィキ政権の評価という根本問題で意見を異にした以上、それは当然のことだろう。

つぎにウストリャロフの論文だが、これはしばしばこの文集でもっとも重要なものと考えられている<sup>23</sup>。そして、ここで注目されるのは、ナショナリズムと進化をめぐる議論だろう。彼はロシア革命をナショナルなもの、きわめてロシア的な現象と捉える（「ロシア革命をナショナルなものと考えないとは、なんと大きな誤解だろうか<sup>24</sup>」）が、この見解は愛国主義とも無縁ではない。彼はいう。「ロシアは一大強国、偉大な国家でありつづけなければならない。」「ロシアの強大さ、国際的威信を回復できるのが、革命政権であり、いまやそれしかない以上、ロシア文化の名の下に、革命政権の政治的権威を承認することがわれわれの義務である<sup>25</sup>」と。こうしたナショナリスティックな傾向は、ウストリャロフだけの特徴ではなく、「道標転換派」全体に通じる「スラヴ派」的な傾向ともかかわっているが、ここではこの問題には深入りせずに、革命の「進化」をめぐる問題に話を移そう。

先にクリュチニコフについて論じながら、「道標転換派」の現状追認の傾向に触れたが、ロシア革命を受け入れるためには、多くの論者にとって、（たんなる時間の経過ばかりでなく）それなりの理由づけが必要だった。そして、そこで注目されたのが、1921年から導入されたネップ（新経済政策）だった。「道標転換派」のひとびとはここに革命の変質、「革命」（revolution）から「進化」（evolution）への転換を見たが、ウストリャロフも同様の分析を行なっている。彼はいう。レーニンは「疑いもなく、『進化している』。」「ソヴィエトを救うために、モスクワは共産主義を犠牲にしている（下線部は原文イタリック、以下同じ）。」「政治的独裁を断固として維持しながら、それ（ソヴィエト政権 引用者注）は国家の経済的再生に必要な手段

を、この手段が《ブルジョワ的性格》のものだろうがおかまいなしに、導入しはじめている」と。亡命社会では、こうした変化を、フランス革命と比較して「ロシアのテルミドール」と呼び、革命の流れに逆らうものとして捉える傾向が強かったが、ウストリャロフはそれには与していない。彼によれば、「テルミドールはフランス革命の転換点」であり、「テルミドールの道は、知性と感情の進化の道<sup>26</sup>」であって、けっして「反革命の勝利」を意味するものではない。むしろ、「人間性と寛容さが革命の場に戻ってきた<sup>27</sup>」のだから、「テルミドールの道は、革命の基盤の再生、その当事者の魂と心の変容のなかにある<sup>28</sup>」。結局、ウストリャロフによれば、ロシア革命はいま挫折の道を歩んでいるのではなく、新たな進化（ユートピアから現実へ<sup>29</sup>）を遂げているのだから、（革命の打破を叫ぶのではなく）この進化を支えることが焦眉の課題となる。ウストリャロフの論は、具体的な提案には乏しいが、世界史的な視野から見たロシア革命の現状分析として興味深い<sup>30</sup>。

以上、この文集を代表すると思える二人の論者の論を眺めてきたが、つぎに順番を飛ばして、もっとも名高いチャホーチンの「カノッサへ！」を紹介したい。彼はまずロシアのインテリゲンチャがこれまでに味わってきた三つの幻滅に言及する。インテリゲンチャはナロード（民衆）を信じ、正しい道を見つけるかれらの「健康な本能<sup>31</sup>」を信じていたが、十月革命でそれが裏切られ、最初の幻滅を味わった。そして、内戦期には白軍に加わり、反ボリシェヴィキ勢力のリーダーたちを信頼したが、かれらにも幻滅する。さらに、連合国にはボリシェヴィキ政権を打倒するための軍事的援助を期待したが、これも期待はずれに終わった。こうして、もはや武力によってボリシェヴィキ政権を倒せる可能性がなくなったいま、チャホーチンは「われわれインテリゲンチャの愛国的義務は、武装闘争を断念すること、それどころか、わが祖国をさらに混乱させ、崩壊させようとする闘争につながる、あらゆる企てと戦うこと<sup>32</sup>」だと考えるにいたる。そして、有名なつぎの言葉を唱える。「われわれはいま、恐れずにこういおう。《カノッサへ行こう！われわれは正しくなかった。まちがっていた。自分自身のために、ほかのひとびとのために、公然とこれを認めるのを恐れはしない》と」。では、なんのために祖国に帰国するのか。チャホーチンの答えは、これまでの論者よりは明快であ

る。「われわれの義務は、病んだ祖国の傷を治す手助けをすること」であり、「ロシアの文化的、経済的再建のエネルギッシュな作業に、インテリゲンチヤが早くとりかかればとりかかるほど<sup>33</sup>」、病人はそれだけ元気になるというのだ。彼はこうもいう。「第一の課題は、全力で一般大衆の啓蒙を促す<sup>34</sup>」ことであり、第二の重要な課題は、「わが祖国の経済的再建にできるかぎり熱心に取り組む<sup>35</sup>」ことだと。

チャホーチンにとっても、もっとも重要なのはインテリゲンチヤの取り組むべき課題だった。「国家の頭脳である、われわれロシアのインテリゲンチヤ<sup>36</sup>」とまでプライドを誇示した彼は、帰国後も非共産主義政党としてインテリゲンチヤの党が認められる可能性にまで言及している<sup>37</sup>し、ロシアに帰国することは共産主義者、ポリシェヴィキになることではない<sup>38</sup>、とも述べている。チャホーチンの論は、本音で語っているという意味で、もっともわかりやすいが、逆にいえば、彼は論争を主導していくタイプではなかったのかもしれない。雑誌『道標転換』で、彼の役割はめだたないものになっている。

文集『道標転換』について、まだまだ注目すべき点はあるが、他の3名の論については概観だけにとどめたい。ルキヤノフは、「革命と権力」のなかで「ポリシェヴィキの進化」について言及し、革命前には一定の階級とはいえなかった「大衆」が、革命政権の「真の社会的基盤<sup>39</sup>」に変容していく過程に「進化」の実例を見ている。そして、革命の払った犠牲がいかに大きかりうとも、「祖国に、誠実に援助の手を差し伸べ<sup>40</sup>」ようと訴えている。

ポブリシチェフ＝プーシキンの論文名は、「新しい信仰」とも訳せるが、ユーラシア主義者と異なって、「道標転換派」は概して宗教とは無縁だった。この論文にも宗教的香りは感じられない。彼はまず三月革命（一般には二月革命と呼ばれる）が、不十分なものだったことを指摘し、十月革命こそが「真の革命<sup>41</sup>」だったと主張する。ところがインテリゲンチヤは、その意義を捉えられずに、あいかわらず「時代遅れの民主主義的公式にしがみつ<sup>42</sup>」ばかりで、未来がソヴィエト体制の側にあることを理解できない。だが、他の国々がますますソヴィエト政権に友好的になり、ソヴィエト政権こそがロシアに現実的な利益をもたらすことが明らかになりつつある

いま、国外のロシア人たちは武装闘争を放棄して、ソヴィエト政権を受け入れなければならない。ソヴィエト政権は、「ロシアを侵食する酸」ではなくて、ロシアの「亀裂を埋めるセメント<sup>43</sup>」なのだから ポブリシチェフ＝プーシキンの主張はこう要約できるだろう。

最後にポテーヒンの「ロシア革命の物理学と形而上学」だが、ここでは「カノッサへ！」ではなく、「仕事へ！家へ！祖国へ！<sup>44</sup>」、「家へ！ロシアへ！<sup>45</sup>」という呼びかけが印象的だ。彼はいう。「インテリゲンチャは何十年間も革命を待ち望み、それを夢見ていた<sup>46</sup>」が、実際に革命が到来すると、恐怖のあまり逃げ出してしまい、いまでは「ポリシェヴィキさえいなくなれば<sup>47</sup>」と願うばかりだ。だが、革命が「ほんとうの進歩の、広い独自の道<sup>48</sup>」を歩みだしたいま、インテリゲンチャは民衆とともに「ロシアに役立つ実際的な仕事<sup>49</sup>」に向かわなければならない。「家へ！ロシアへ！」、そして、民衆のことだけを考えて、ロシアを「もっと明るく、もっと広々したものに、つくりかえて<sup>50</sup>」いかななければならない。「道標転換派」のナショナリズムは、ここでも鮮明に現われている。

以上文集『道標転換』に収められた6つの論文を概観してきたが、これらをまとめる前に、雑誌『道標転換』を簡単に紹介しておこう。

## 2) 雑誌『道標転換』

雑誌『道標転換』は、クリュチニコフの編集による週刊誌で、1921年10月29日にパリで発刊された。毎号20ページあまりの薄手の雑誌で、巻頭にはしばしば「社説」( )が掲げられ、以下いくつかの記事、そして最後に「ロシアから」( )と題された記事(ソ連文化の紹介から、ソ連在住者が執筆した論説<sup>51</sup>、ソ連事情などさまざま)が載せられるのが一般的だった。「社説」はおそらくクリュチニコフが中心になって書かれたと思われるが、彼は自分の名前を記した記事も書いているし、文集『道標転換』のメンバーであるウストリャロフ、ルキヤノフ、ポブリシチェフ＝プーシキン、チャホーチン、ポテーヒンらもこの雑誌に稿を寄せている。ただ、文集『道標転換』が理論的性格を帯びたアピールだったのに対し、こちらは現実の諸問題(ソ連国内における飢餓、列強諸国によるソ連の承認など)に即し

て自分たちの考えを検証していく、といった色彩が強いようだ。

まず創刊号の「社説」に目を通すと、この雑誌を刊行した目的がつぎのように述べられている。「今日から刊行される週刊誌『道標転換』は、国外にいるロシアのインテリゲンチヤとロシア、ロシア革命との和解を進めるさらなる一歩でありたいと願っている。それとともに、この雑誌はもうひとつの重要な課題を立てているが、それは国外のロシア・インテリゲンチヤとロシアに住むロシア・インテリゲンチヤとの架け橋になることだ<sup>52</sup>」。論はさらに、まだ弱々しい新ロシアを支えることを訴え、「われわれロシアのインテリゲンチヤ」は、「偉大なロシア革命の事実を、心から誠実に受け入れるあらゆるひと」とともに歩みたいと述べて、「ロシアとその未来を信じ、みずからの道の正しさを信じて、われわれはみずからの課題の実現に向けて進んでいく<sup>53</sup>」と結んでいる。

もちろん、こうした論説を詳しく眺めていくのもおもしろいが、ここでは文集との重複を避ける意味でも、抽象的な議論より、具体的な話題をめぐっての論争に注目したい。その意味でもっとも興味深いのは、「祖国への帰国」をめぐる議論だろう。すでに見たように、文集『道標転換』の主眼は、ロシア革命を受け入れて祖国に帰国し、そこでインテリゲンチヤとして祖国のために働こう、という呼びかけにあった。だが、そう呼びかけたかれらが、ただちに帰国したわけではない。文集『道標転換』に寄せられた批判のひとつは、そんな言行不一致にあった。雑誌の第4号で、クリュチニコフはそんな疑問に対して、「時が来れば、われわれは帰る<sup>54</sup>」と答えたが、もちろんこれで相手が満足するはずはなかった。そして、度重なる攻撃に業を煮やしたかれらは、ついに正面からこの問いに答えざるをえなくなる。第11号に掲載されたウストリャロフの「帰国 の問題」を見てみよう。

「決定的な変化の時機はまだ来ていない」、ウストリャロフはソ連国内の現状をこう説明する。「ソヴィエト・ロシア本国においても、(非ポリシェヴィキの)インテリゲンチヤはまだ十分に能力を生かしきれているとはいえない<sup>55</sup>」。インテリゲンチヤでも薪を割ったり、道路を清掃したりするような、肉体労働に従事せざるをえないのが、ソ連の実情だ。だから、「亡命者が故国に帰るためには」、まだ克服しなければならない課題がたくさんある

これは本音だろう。だが、そこでウストリャロフは苦しい言い訳をする。「ロシアに奉仕することは、さいわいなことに、本国にいなくとも、国外でも可能だ。では、なにができるのか。彼はいう。亡命者は「外国人がロシア革命を理解し、意義づける手助けをしなければならない。」「文明世界と新しいロシアとを和解<sup>56</sup>」させなければならないと。ようするに、国外にいながらも、西欧諸国の知識人にロシア革命の意義を宣伝していれば、祖国に役立つことができるというのだ。およそ説得力を欠いた強弁だが。

ただ、こうしたかれらの苦しい立場の背後には、帰国を切望する亡命者たちのいちばんの不安である「安全」の問題があり、それは「特赦」の問題ともつながっている。第7号に掲載されたボブリシチェフ＝プーシキンの「特赦について」を見てみよう。「偉大な革命の4周年にあたって、特赦は兵士だけに与えられている。実際には、1921年初めに、「希望するものは誰でも帰国できる<sup>57</sup>」という決定がもう少しでなされるところだった。ところが、亡命政治サークルの「トロイの馬」戦略（帰国者のなかにエージェントを送り込んで、本国で反乱を組織しようとする戦略）のためにだめになってしまった。ボブリシチェフ＝プーシキンは嘆く。特赦がいない人、とことん戦おうという人はそれでいい。でも、だからといって、帰国だけが最後の望みであるひとびとの希望を絶つことだけはしてくれるなど<sup>58</sup>。このほか、「安全」を保証するといわれても、実際に帰国した人の例を見なければ信用できない、という不安について触れた記事もある<sup>59</sup>ように、亡命者たちにとって、帰国は、言葉としては魅力的でも、実際には容易に実現しがたい夢だった。

このほか、注目されるテーマをいくつか挙げれば、まず「進化」の問題はここでもさかんに取り上げられている。だが、ルキヤノフが、ソヴィエト政権の進化はネップだけでなく、個人の権利の問題にも見られるとしている<sup>60</sup>のに対して、ウストリャロフは「ボリシェヴィズムの進化」は「その政治の進化であって、哲学の進化ではない<sup>61</sup>」と主張しているように、力点の置き方は論者によって多少異なっている。具体的な問題としては、パスポートの問題（難民としてのパスポートをもらうか、ソヴィエト政府に申請して、ソ連国民のパスポートをもらうか<sup>62</sup>）は、当時の亡命者に突きつけられた大きな課題だっただろうし、飢饉への援助の是非をめぐる論争（飢饉を援助する

ことは、ソヴィエト政権を支えることになりはしないか<sup>63</sup>)は、ある意味で今日的な意義を持っていよう。また、ソヴィエト政権の承認をめぐる話題が繰り返しページを飾っている<sup>64</sup>のは、今日の視点からは(1922年4月のラバロ条約調印を踏まえれば)当然のことだろう。

注目すべき問題はまだまだ少ないが、最後に「道標転換派」と帰国運動についてまとめておきたい。

### 3)「道標転換派」と帰国運動

ロシア革命とつづく内戦は100万を超える亡命者たちを世界各国に送り出した<sup>65</sup>。だが、ここで「亡命者」というなにげない言葉にもう一度注意を向けてみよう。Suomelaによれば、1917年から1921年まで、ロシアからやってきたのは「難民」、一時的な避難民であり、当時「亡命者」と呼ばれたのは、みずからの意志で国外にとどまることを決意したひとびとだったという。つまり、1920年代初めには、「難民」と「亡命者」は意識して区別されていた。ところが、内戦が終わり、1921年からは、「難民」という語は用いられなくなり、ソヴィエト・ロシアの国外にとどまったすべてのロシア人は「亡命者」と呼ばれるようになった<sup>66</sup>」という。とすれば、1921年に刊行された文集『道標転換』を論じるさいも、この用語の区別は十分考慮されなければならないだろう。「道標転換」運動は、一般に考えられているように、「亡命者」たちに本国への帰国を促す運動ではなく、「難民」たちに「亡命者」への道を選ばないように訴える運動とも考えられるからだ。

すでに触れたように、文集『道標転換』には、しばしばロシア革命から4年を経過しようとしているいま、という表現が見られた。だが、この語は誤解を生みやすい。亡命者たちがすでに4年近くも国外で暮らしているように聞こえるからだ。実際には、ウランゲリ軍が敗れて、内戦が終結したのは1920年11月のことであり(1921年11月19日に刊行された雑誌『道標転換』第4号には、「クリミアの一周年に寄せて」と題した記事が掲載されている)、文集『道標転換』が刊行されたときには、内戦が終わってまだ8か月しか経っていなかった。さらに、ウストリャロフの論文は1920年に刊行された彼の著書『ロシアのための戦いで』( )<sup>67</sup>に拠るものであり、

しかも彼がハルピンに亡命したのは同年初めのことだから、これは亡命直後に書かれたものといってもよい。「道標転換派」に寄せられた「あまりにも早く<sup>68</sup>」立場を変えたとの批判はある意味で当然だった。

さて、1920年11月ウランゲリ軍はクリミアから船で国外に逃げるが、コンスタンチノーブルにたどり着いた多くの兵士たちは大きな失望を味わう。住むところも、食べ物もおよそ十分とはいえなかったからだ。かれらの「80%は帰国を望み、99%は連合軍を憎んでいた<sup>69</sup>」という。そして、実際翌21年2月帰国希望者およそ3,600人を乗せた最初の船がロシアに向かった<sup>70</sup>。帰国者の波はその後も続くが、帰国を許されたのは、基本的に白軍に強制的に動員された兵士だった<sup>71</sup>。そして、1921年末には、ソ連のエージェントが関与して、多くの国で「祖国への帰国同盟」( )が組織される<sup>72</sup>。つまり、一方ではこうした兵士たちの帰国運動が進んでいた。

こう考えると、「道標転換派」がインテリゲンチヤを強調したことの別の意味が見えてくる。すなわち、インテリゲンチヤとは、軍人に対する文民の意味も担っていたのではなからうか。兵士の帰国は不可能ではない。だが、民間人、とりわけポリシェヴィキ以外の政党関係者の帰国は困難をきわめていた。そこに風穴を開けようとする試み、それが「道標転換」運動だったのではないだろうか。そして、そのためのひとつの戦略が「数」だった。かれらは文集を出しただけでなく、雑誌も刊行して宣伝につとめ、少しでも多くの支持者を得ようと努力した。多くの陣営から集中砲火を浴び、支持者が少ないことを指摘されると、かれらは「われわれは日に日に数を増している<sup>73</sup>」と反論している。「数」こそがソヴィエト政権に対して、交渉を有利に進めるための条件だったにちがいない。

「道標転換」運動には、しばしばソヴィエト政府からの資金援助が指摘されている<sup>74</sup>。それは事実だったろう。だが、たとえ運動を進めるなかで資金を受けたにせよ、どうしたら祖国に帰国できるか、そこでインテリゲンチヤとして活躍できるか、という問いはかれらにとって真摯なものだったにちがいない。祖国への帰国、それは多くの亡命者にとって最終的な目標だった。ただ、ポリシェヴィキ政権が倒れるまでは帰国しない、と決意した多くの亡命者に対して、ポリシェヴィキは「進化」したのだから、と訴えたかれらの

主張にも耳を傾けるべき点は少なくない。実際、ポリシェヴィキ政権が容易には崩壊しないと見抜いた点で、先見の明はかれらの側にあったのだから。

Suomela によれば、ソ連への帰国者は1921年に12万人、1922年には18万人にのぼり、1922年には帰国運動がピークを迎えたが、それは「道標転換派」の宣伝によるところが大きかったという<sup>75</sup>。とはいえ、割合からすれば、ソ連に帰国できた亡命者は決して多くない<sup>76</sup>。そこには迫害・処刑という心理的に超えることのできない壁が厳然として存在していた。「道標転換派」の運動は、ロシア亡命文化史の悲劇性を鮮明に映し出している。

(注) ロシア語の旧字体はすべて新字体に直している。

## 注

1 東郷正延他編『研究社露和辞典』、研究社、1988年、p. 189.

2 和久利誓一他編『岩波ロシア語辞典』、岩波書店、1992年、p. 1800.

3

1918-1940

( ),

« », 2004, . 147.

4 なお、引用はフィンランド語からロシア語への翻訳によっているのも、著者ではなく、翻訳者の誤解の可能性も否定できない。

5

20-30- ( )

1917-1940. . 1. ; , 1994, . 77.

6 N. « », , № 1, 29 1921 . . 17.

7 ベルンシュタイン・コレクションにかんしては、

<http://www.lib.hokudai.ac.jp/collection/ogatacollection/bern/> を参照されたい。

8 雑誌『道標転換』は、1921年10月29日の第1号から週刊で刊行され、ベルンシュタイン・コレクションには第1号から1922年3月4日の第19号までが収められている。ストルーヴェによれば、この雑誌は1922年3月25日の第20号で廃刊になったというから、残念ながらコレクションには最終号だけが欠けているようだ。

. New York:

, 1956 ( Reprint: Paris: YMCA-Press, 1984 ), . 35.

- 9 . . . . .( . . . ) . . . . . XIX-XX . . . . . , 2003, . . . . .
183. なお、サイモン・カーリンスキーも、「ユーラシア主義」は、「道標転換派」よりも「はるかに知的水準の高いものであった」と述べている。サイモン・カーリンスキー『知られざるマリナ・ツヴェターエフ』（亀山郁夫訳）晶文社、1992年、p. 194.
- 10 . . . . . : . . . . . , 1997, . . . . . 295.
- 11 . . . . . ( . . . . . ), . . . . . , 1993, . . . . . 71.
- 12 . . . . . , № 2, 5 . . . . . 1921 . . . . . 3.
- 13 . . . . . : [ . . . . . ], 1921, . . . . . 40.
- 14 . . . . . 38.
- 15 . . . . . 30.
- 16 . . . . . 33.
- 17 『道標』にも参加したイズゴエフは、クリュチニコフの論を論じながら、「しばしば曖昧模糊としていて、不明確」だと批判している。 . . . . . « . . . . . » . . . . . « . . . . . » . . . . . , 1922, . . . . . 11. なお、この本もベルンシュタイン・コレクションに所蔵されている。
- 18 . . . . . 31.
- 19 . . . . . 33.
- 20 . . . . . 50.
- 21 . . . . . 14.
- 22 . . . . . 5.
- 23 . . . . . , . . . . . 77.
- 24 . . . . . *Patriotica* . . . . . 53.
- 25 . . . . . 57.
- 26 . . . . . 66.
- 27 . . . . . 68.
- 28 . . . . . 70.
- 29 . . . . . 71.
- 30 コンドラチエフによれば、ウストリャロフは「テルミドールの歌い手」と呼ばれていたという。 . . . . . , 70.
- 31 . . . . . ! . . . . . 152.
- 32 . . . . . 156.

- 33 , .159.
- 34 , .162.
- 35 , .163.
- 36 , .159.
- 37 . , .166.
- 38 . , .159.
- 39 , . . , .88.
- 40 , .90.
- 41 - , . . , .102.
- 42 , .117.
- 43 , .146.
- 44 , . . , .172.
- 45 , .182.
- 46 , .170.
- 47 , .171.
- 48 , .173.
- 49 , .172.
- 50 , .182.
- 51 ソ連在住者としてはチレノフ ( . ) が頻繁に寄稿しており、彼をストルーヴェは「モスクワの道標転換派」と呼んでいる。 . , .34.
- 52 . , № 1, 29 1921 . , .2.
- 53 , .3.
- 54 , . . , № 4, 19 1921 . , .2.
- 55 , . « . » . , № 11, 7 1922 . , .10.
- 56 , .11.
- 57 - , . . , № 7, 10 1921 . , .7.
- 58 . , .8.
- 59 . , . ( . ) . , № 12, 14 1922 . , .17.
- 60 . , . . , № 5, 26 1921 . , .12.
- 61 , . . , № 13, 21 1922 . , .18.
- 62 . - , . . , № 15, 4 1922 . , .5-9.
- 63 . - ( . ) .

- № 18, 25 1922 . . 4-6.
- 64 たとえば、第12号（1922年1月14日）から第15号（1922年2月4日）まで、巻頭の記事はみなこの問題を論じている。
- 65 この人数に関しては、Suomelaの説明が説得的である。 . . . 36-38.
- 66 . . . 34.
- 67 この本もベルンシュタイン・コレクションに所蔵されている。
- 68 . . . 2.
- 69 . . . . . 1920 . . . . . ; 2004, . 256.
- 70 . . . 258.
- 71 . . . 35.
- 72 . . . 267.
- 73 . . . 2.
- 74 . . . . . « . . . . . »: . . . 1917-1940. . 2, . 11.
- 75 . . . 152.
- 76 全体の10%以下という説もある。 . . . 248.

A Collection of Essays «Changing Landmarks»  
and a Journal «Changing Landmarks»

Yuichi ISAHAYA

Key words: emigration, russian revolution, intelligentsia, returning movement